

下宅部遺跡における 縄文土器の敷物圧痕分析 土器製作に用いられた編組製品について

Analysis of Mat Print at the Bottom of Pottery from Shimo-yakebe Site :
Woven Items Used for Making Pottery

真邊 彩

MANABE Aya

はじめに

①敷物圧痕の研究史と問題点

②分析対象資料と分析方法

③結果

④考察

まとめ

【論文要旨】

本論は、下宅部遺跡出土の縄文土器に残る敷物圧痕、中でも編物底について、編組技法および素材形状の分析をおこなったものである。下宅部遺跡は、関東地方で最も多く編組製品が出土し、同時期の編組製品と編物底が出土した稀有な遺跡である。編物底の研究は1890年代からおこなわれているが、同一遺跡での編物底と編組製品を比較した例はほとんどない。そのため、本遺跡での分析は、編物底から読み取れる資料が編組製品資料の中でどのように位置づけられるのかという点において、重要なケーススタディといえる。本論は、下宅部遺跡から出土した編物底の復元に圧痕レプリカ法を採用し、編物底と出土編組製品との編組技法・パターン、素材幅、素材形状の比較を通して、土器製作に用いられた編組製品の特徴を概観したものである。

分析の結果、出土編組製品と編物底では確認できる編組技法・パターンの数が異なっており、編物底と出土編組製品の素材幅の比較においても、編物底から復元された資料は素材幅が細い範囲にまとまることが明らかになった。以上の検討により、編物底には、土器製作に適した、素材幅が細く隙間が少ない編組製品が、選択・転用された結果が反映されたと指摘した。レプリカによる素材分析の結果、SEMで確認された組織および形状の特徴から、編物底の圧痕は編組製品と同じタケ亜科製品に由来する可能性があるとした。これらは、編物底研究に圧痕レプリカ法とレプリカのSEM観察という手法を導入したことで得られた成果といえる。

本研究を通じ、編組製品研究においては、編物底と出土編組製品の双方からの検討が重要であることを再認識し、今後の研究においては、編物底として残存する資料は、土器製作における人為的選択が働いた結果が反映されていることを念頭におく必要があると指摘した。

【キーワード】 敷物圧痕、編物底、圧痕レプリカ法、素材